

天声人語

「大晩年」「大往生」「二度の大往生」「終・大往生その後」。人生の終え方について話題作を次々世に出したタレントで作家の永六輔さんが亡くなつた。83歳だった▼その晩年はパーキンソン病との闘いだつた。転んで足首をねんざし、肩を脱臼した。ズボンをはこうとしてバランスを崩し、大腿骨も折つた。自らを「パークインソンのキーパー・ソーン」と笑つた▼学校に上がる前から病院暮らしが長かつた。おなかがポコンとふくれ体は針金のよう。ラジウム放射線治療を受けたが、なかなか治らない。それが空襲を避けて信州小諸へ疎開したらすっかり健康に。子どもながら医学不信に陥つた▼若いころから放送作家や作詞家としてヒットを連発する一方、政治に対する挫折感を抱えていた。「上に向いて歩こう」は、安保条約改定に反対する運動の敗北感から生まれた。連日出かけた国会前のデモが蹴散らされ、無力感に沈んだ。50歳の夏、参院選に挑み、あえなく落選した▼「テレビの言葉には本音が少ない」と、自由に遊べるラジオの仕事を愛した。女優が気象データとは縁のない架空の天気予報を読み、外国出張の番組は、亡くなる前の週まで続いた。権力におもねらず、市井の人々に寄り添う姿勢は終生変わらなかつた。いまごろは天国のスタジオで自らの晩年や往生を笑いを交えて語つてゐるだろうか。

2016・7・12